

『グリム童話集』より「野ばら姫」について

94K005 青池祥子

「野ばら姫」は、日本では「眠れる森の美女」というタイトルの方がよく知られている。ディズニー映画では「Sleeping Beauty」と名付けられ、眠れる美女と思われているが、実際の話では姫だけでなく、森の中にある城全体が眠っているのである。

「野ばら姫」は、「白雪姫」と同じく、親が子供を欲しがらる場面から始まる。王家に後を継げる子供が一人もいないという深刻な悩みは、水浴中の王妃が蛙の予言を受けることで解決される。予言どおりに、王妃は子供を授かり、美しい娘が生まれるが、なぜ蛙がそのような予言をしたのだろうか。

初稿ではこの場面で出てきたのはザリガニであった。後に蛙に変えられたのは、蛙の方が「高等な生き物で、メルヘンに登場してくるにはふさわしい印象を与える」⁽¹⁾からだ、金成陽一は推測している。蛙は、人間の生活する場所のすぐそばにいる身近な生物である。そして、ゼリー状の卵を沢山生むことから、しばしば多産や豊饒の象徴とされる。ベッテルハイムは蛙について、興奮すると膨れ上がるその性質が「無意識的にはペニスの勃起を連想させる」⁽²⁾と述べている。金成は、王妃は蛙の予言を受けた時に妊娠したと考えている。蛙が姫の父親だとは言っていないが、イーリング・フェッチャーは、蛙がどこにでもいるものということから、市民階級の男であり、姫はその男と王妃の不義の子としている。

さて、王と王妃は生まれた姫のために、神通力を持った女たちを呼び、姫に祝福を与えてもらおうと考える。国には全部で13人いたが、彼女たちをもてなすのにふさわしい皿は12枚しかなかった。これについて金成は、以前から嫌っていたある女を呼ばないための幼稚な言い訳と片づける。確かに、一国の王が皿一枚用意できない程貧しいとは考えられない。中世の人々にとって宴会は同じ物を飲食し生命力をわかちあう大切な儀式であった。13番目の女は大切な儀式から幼稚な理由ではじき出された。彼女は意趣返しをする。王と王妃の宝である姫に呪いをかけるのである。

アンジェラ・ヴァイプリンガーは、この場面の解釈を太陰暦から太陽暦への移行と考えている。13番目の女は、母権制の時代に崇拝された月の女神である。しかし、時が移り、父権制の時代に彼女は忘れられてゆく。そのことを示しているというのである。

とにかく、姫は15歳までの寿命を保証される。王は姫のために国中の紡錘を焼き捨てる。しかし、15年の時が流れると、予言どおり姫は紡錘に刺され百年の眠りにつく。なぜこの運命の日に両親は城を空けていたのだろうか。後継ぎ娘の誕生パーティーより大切な行事が何だったのか気になる所だが、何も書かれていない。

姫が紡錘で指を傷つける場面については、さまざまな解釈者たちもほとんど意見が一致している。つまり、性的経験である。精神分析学者ベッテルハイムによるこの場面の解釈は次のようなところである。姫が塔のらせん階段を昇るとするのは性的経験を示し、鍵を差し込み、回すことは性交の象徴である。また、姫が指から出血するのは月経を表わすというものである。

姫はそのまま百年の眠りにつく。この直前に姫は糸を紡ぐ老婆に会う。この老婆は例の13人目の女かどうかは判断の分かれる所である。老婆は、その正体が13人目の女であるという証拠を何一つ残していないのであるから、私としては、13人目の女と決めつけるヴァイプリンガーより、決めつけない金成の方を支持したい。少なくとも私はそう指摘されるまで、13番目の女＝老婆という可能性に全く気付かなかったのである。

姫の眠りを守る様に、いばらが城を包み、選ばれた王子が来る日までその入口を閉ざす。何人もの王子が姫のうわさを聞き、やって来るが、誰一人中へ入れない。この王子たちとは何者だったのだろうか。

中世ヨーロッパでは、普通、父と息子の対立を避けるため息子は旅に出た。家長が二人いるのは不都合なのである。長男には家督を継ぐという未来があるが、次男、三男は、修道院に入るなり、旅をして別の王に仕えるなりする必要があった。戦争が頻繁にあった頃であれば、出世するチャンスも多くあったが、中世末期はそうもいかず、騎士たちは出世のチャンスを渴望していた。こうした背景から、何人もの王子がいばらに挑戦したと思われる。うまく運べば、王として君臨できるまたとないチャンスとなる。最後に現れた王子も、そういう一人ではなかっただろうか。

この王子は他の王子と較べて特に優れている訳ではない。死を覚悟の上でいばらに突入したのは皆同じである。ただ彼は丁度よい時期に現れ、すんなり入れただけである。あるいは百年の眠りを計算して行動したのであれば、その明晰さは彼の評価を高めるものになる。

結局、この話の意味するところは何であろうか。テーマの一つに予言が挙げられる。物語が動く時、予言がなされている。蛙の予言と呪いの予言である。どちらも予言のままに、操られるように動いている。

また、収集童話の特徴である善と悪の対立がはっきり描写されていないのも、この物語の特徴である。唯一悪人らしい13番目の女にしても、元をただせば仲間はずれにされた被害者である。ポイントはやはり、百年の眠りという時間と、眠りと目覚めという死と再生にあるだろう。収集童話のルーツが太古の神話のかけらであるとするグリムの主張を考えれば、これは季節の移り変わりの神話とも理解できる。また、金成の指摘によれば、百年の眠りとは、女性が物を言えぬ男性優先社会で耐え忍ぶ女性を象徴するものだとも読めるかもしれない。

註

(1)、(2) 金成陽一『誰が「ねむり姫」を救ったか』27ページ。

参考文献

金成陽一『誰が「ねむり姫」を救ったか』大和書房、1993年

イーリング・フェッチャー『だれが、いばら姫を起こしたのか』丘沢静也、筑摩書房、1984年

マリア・タター『グリム童話—その隠されたメッセージ』鈴木晶他訳、新曜社、1992年

(指導教員 桑原ヒサ子)